



教皇様の聲

11

235号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1999

完全な浄化が不可欠

1 2度のカテケージスで見てきましたが、神に従うか抵抗するかという最終的な選択のとき、永遠の至福の中で神と共に生きるか、神の存在から遠く離れているかという二者択一に直面することになります。まだ不完全であるにせよ、神に心を開いている者であれば、完全な至福へ向かう旅路には浄化が必要であることが理解できます。このことは教会の教えの中で「練獄」についての教えに記されています。（「カトリック教会のカテキズム1030～1032番」参照）

神の生命にあずかるためには完全な浄化が必要

2 はっきりと言い表わされてはいませんが、聖書を通して、練獄の教えを理解するための要素をとらえることができます。浄化というものを通らなければ、神に近づくことはできないという信仰が、聖書には表されています。

旧約聖書によると、宗教上のおきては神に至るための道であり、それゆえ完全でなければなりません。結果的に、神と接するためには体も汚れのない状態であるべきことは明らかです。例えば、神に捧げるいけにえの動物にも傷があってはならず（レビ22・22参照）、また聖なる場所で祈りを捧げる聖職者も清い体を持っていないければなりません。（レビ21・17～23参照）契約の神に対する全き献身は、申命記（6・5参照）の偉大な教えに従うものであり、その教えからも汚れのない体の重要性が分かります。個人と社会全体にそのような献身が求められています。（列王記上8・61参照）清らかな心を持って行いで示し、全存在をかけて神を愛することが大切なのです。（同上10・12以下参照）

死後、神との完全な一致に至るために、完全さが必要であることは言うまでもありません。完全でない者は、清められる必要があるのです。このことは聖パウロの言葉に暗示されています。聖パウロは、人それぞれの働きが審判の日に明らかにされることを話し、また次のように言います。「だれかがその土台（キリスト）の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受け

ますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように救われます。」（1コリント3・14～15）

3 時々、完全な清らかさに至るために、ある人の取り次ぎと仲介が必要となります。例えば、モーセは過去に神が行なった救いのみわざを思い出し、祈り、人々の罪の赦しを得ました。また、モーセは神が先祖に対して行なった誓いのためにも祈ります。（出エジプト32・30、11～13参照）イザヤの書に描かれている神に仕える者の姿も、多くの人々のために取りなしを行う者として表されています。人々が死を前にした最後の苦しみにあるとき「光を見るように」、そして、罪を持つ「たくさんの人々が赦されること」を祈り求める姿です。（イザヤ52・13～53、12、特に53・11参照）

旧約聖書の観点によると、詩篇51は靈魂が完成する過程を総合的に述べていると考えられます。罪人は告白し、罪を認めると（3参照）、神への賛美を示すために（15参照）浄化され「清められる」ことを請い求めます。（2、9、10、17参照）

練獄は場所ではなく状態である

4 新約聖書でキリストは、償いの日、大司祭としての役割を引き受ける仲介者として表されます。（ヘブライ5・7、7・25参照）けれどもキリストにおいて、司祭職は新しく最終的な形で示されます。キリストは、今や天国の神殿に至り、私たちの代わりに神に取りなしてください。（ヘブライ9・23～26、特に24）キリストは司祭であると同時に、この世の罪を「あがなうための犠牲」でもあります。（1ヨハネ2・2）

イエスは、人間の代わりに罪を償ってくださる偉大な仲介者ですが、私たちは命が尽きるとき、完全な姿のキリストと出会うこととなります。そのとき、キリストは憐れみを示されますが、御父の愛と赦しに背いた者には避けることのできない罰をも与えます。キリストの憐れみによって私たちは神のみ前に立つことが

できるのです。神は、パウロが「全てを完成させる『きずな』」（コロサイ3・14）と呼ぶ、まったく完全な愛に満ちた方です。

5 地上においても天の御父のように完全であるように（マタイ5・48）という福音書のすすめに従うと、私たちは、愛のうちに成長するよう呼ばれていることがわかります。それは、「私たちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき」（1テサロニケ3・12以下）父である神のみ前で傷のない完全な者となるためです。さらに、「肉と霊のあらゆる汚れから自分を清め」（2コリント7・1、1ヨハネ3・3参照）るよう招かれています。神と出会うためには完全に清くなければならないからです。

悪への執着によってできた傷跡は全て取り除かねばならず、不完全な霊魂は完成されなければなりません。浄化は徹底的に行われる必要があります。これこそ確かに教会が示す煉獄についての教えの本質です。煉獄という言葉は場所ではなく、ある存在の状態を示しています。死後、煉獄で清められている者は、すでにキリストの愛の内にあります。キリストは霊魂から不完全な部分を取り除いてくださいます。（フロレンス公会議、「カトリック教会公文書資料集」（DS）1304、トリエント公会議、（DS）1580、1820参照）

はっきりさせなければならないのは、煉獄はこの世の状態の延長ではなく、死後、運命を変えるもう一

つの可能性を与えられた者、つまり地獄にいる霊魂とほとんど同じ状態であるということです。この点での教会の教えははっきりしており、第二バチカン公会議でも再確認されました。「主が忠告したように、われわれはその日も時も知らないのであるから、絶えず警戒を怠ってはならない。われわれの地上生活の一回限りの行程を終えた後（ヘブライ9・27参照）、主とともに婚宴に入り、祝された人々のうちに教えられるよう心がけ、また、怠惰な悪いしもべのように、「嘆きとはがみのある」外のやみの中へ、永遠の火の中へ離れざることを命じられないよう警戒しなければならない。（マタイ22・13、25・30）」（「教会憲章」48）

6 最後の大事な点は、教会が伝統的にいつも指し示してきたことです。今日再び、その重要な点である「交わり」について提示しなければなりません。煉獄にいる霊魂は実際、すでに永遠の生命にあずかっている霊魂と、御父の家に向かっている地上の私たちと交わっているのです。（「カトリック教会のカテキズム」1032参照）

地上の生活で、信じる者が一つの神秘体に一致しているのと同じように、死後、煉獄にいる者も祈りによって実現する教会との交わりを体験します。とりなしの祈りと信仰における兄弟姉妹への愛による交わりです。浄化のためになくってはならないのは、この世で生きている者と永遠の至福にあずかっている者との絆なのです。

（1999・8・4）

地獄は神に背く者の状態

1 神は無限に善い方、憐れみ深い御父です。人間は、自ら進んで神に應えるよう呼ばれていますが、不幸にも、神の愛と赦しを決定的に拒んで、神との一致の喜びから永遠に離れ得る存在です。この悲劇的な状態こそ、永遠の破滅つまり地獄についてキリスト教が説明したいことなのです。地獄とは、神が外から課する罰ではなく、すでにこの世で人間が準備してきたことの結果です。このように地獄へ至る条件はなかなか分かりにくいものですが、少なくともその苦しみは、「地獄」のような苦しみと言われるほどのつらい経験を考えることで、ある程度感じ取ることができます。

しかしながら、この世での苦しい経験を考えてみても、神学的意味での地獄を理解することはできません。地獄とは罪の最終的な結果であり、罪はそれを犯した者に敵対してきます。地獄は、最後の瞬間においてさえ、決定的に御父の憐れみを拒む者の状態です。

地獄では永遠に責め苦を受ける

2 地獄を説明するために、聖書では象徴的な言葉を使って徐々に明らかにして行きます。旧約聖書では、死後の状態についてまだ完全に啓示されていませんでした。しかも死者は、二度と這い上がれず（ヨブ7・9参照）、神を賛美することもできない（イザヤ38・18；詩篇6・6）深くて暗い死者の国（エゼキエル28・8；31・14；ヨブ10・21以下；38・17；詩篇30・10；88・7、13参照）に集められると思われていました。

新約聖書は死後何が待っているかという問いに対して新しい知識を与えてくれます。新約聖書は特に、キリストが復活によって死を克服し、死者の国にも死から解放する力を示してくださったことを主張しています。

それにもかかわらず、救いを得るかどうかの選択権は人間の側に残されています。それぞれ「自分の『行

い」に応じて」(黙示録20・13) 裁かれるというのはこのためです。新約聖書は、比喩的表現を使って、悪人のために定められた場所を燃え盛るかまどとして示し、そこに入る人々は「泣きわめいて歯ぎしり」(マタイ13・42、25・30、41参照) するといい、また「消えない火」(マルコ9・43) を燃えるゲヘンナのような場所としても表しています。このことは金持ちのたとえ話で語られます。そのたとえ話によると、地獄は永遠に苦しむ場所、もとに戻ることも痛みが和らげられる可能性もないことが明らかにされます。(ルカ16・19～31参照)

黙示録もまた、命の書から除外された人々が「火の池」に投げ込まれ、「第二の死」に出会うことを象徴的に示しています。(黙示録20・13以下) 福音から離れている人々は誰でも、「主の面前から退けられ、その栄光に輝く力から切り離されて、永遠の破滅」(2テサロニケ1・9) を受ける刑罰への道を歩んでいることとなります。

3 聖書で表される地獄のイメージは正しく解釈しなければなりません。聖書によって、地獄はこの上ない欲求不満に満ちた神不在の完全に空虚な状態であることがわかります。地獄は場所というよりも、生命と喜びの源である神から自由に決定的に離れる者の状態を示しています。カトリック教会のカテキズムはこの問題に関する信仰の真理を次のように要約しています。「大罪をもったまま、痛悔もせず、神の慈悲を受け入れることもせずに死ぬことは、私たちが永遠に神から離れることを自由に選択することである。この神と至福者たちの交わりから決定的に離別した状態こそ、『地獄』の言葉が意味するものである。」(1033)

したがって「永遠の破滅」状態を神のせいにすることはできません。憐れみ深い愛の持ち主である神は、ご自分が創造された人間の救いをただ望むばかりなのです。実際、神の愛に心を閉ざすのは被造物の方で

す。本来、破滅が神との決定的な離別にあるのは明らかです。人間が自由に破滅を選択し、死と同時にその選択が永遠に動かぬものとなるのです。そして、この人間の判断を神は承認されます。

悪魔に打ち勝ったイエスは、地獄へ向かう人間を救う

4 「はい」または「いいえ」のどちらを選ぶかは被造物である人間の自由にまかされています。キリスト教の信仰によると、どちらかに決める重大な瞬間に、拒否を選択した者がいました。「いいえ」と言うのは、神の愛を拒んだ悪魔と呼ばれる霊的な被造物です。(第四回ラテラン公会議、「カトリック教会公文書資料集」800-801参照) 悪魔に起こったことは私たちに対する警告でもあります。罪を犯すという悲劇を避け、神に「はい」と答え続けたイエスの生き方と一致するようという絶え間ない呼びかけです。

永遠の罰が与えられる可能性は現実に残されていますが、特別な神の啓示がなければ、本当に人間が地獄に巻き込まれるのか、どのような人が地獄に行くのかということをしちんと知ることはできません。地獄のことを考えたり、まして聖書の比喩的な表現を間違っ使用することで、不安や失望が引き起こされるようなことがあってはなりません。しかし、地獄について考えることは必要です。復活したキリストが悪魔を征服し、私たちに働きかけて「アツバ、父よ！」(ローマ8・15、ガラテヤ4・6) と呼ばせる聖霊が送られたことを覚えているなら、地獄について考えることは自由を思い起こす良い機会になります。

希望に満ちたこの見通しは、キリストの教えの中に広く行き渡っており、教会の伝統的な典礼の中では効果的に表されています。ローマ典礼文によって次のように証明されます。「わたしたち 一 奉仕者と全家族 一のこの奉獻をこころよく受け入れ、... 永遠の滅びから救い、選ばれた者の群れに加えてください。」

(1999・7・28)

神への愛に成長して悪を克服しよう

(教皇様は若者たちと会見し、現代生活における信仰の意味についての質問に答える：9月号の続き)

〔第三の質問〕

「教皇さまはヨハネの第一の手紙の一節を思い出させました。『目で見ている兄弟を愛さない者には、見えない神を愛することができない。』言い換えれば、兄弟たちへの愛や赦し、平和、連帯の行為は、御父への愛に発するものでなければならぬということですね。こうした愛や赦しの必要について私たちが全く同感であり、紀元二千年の聖年の扉に向かって、特に私たちの改心のしるしとして頑張りたいと思います。し

かし私たちの中には、教会がどのように愛したり赦したりするのかよくわからないと言う人もいます。教皇さまは赦しの証人です。自分を負傷させた者をさえも赦すことのできる方、教会の犯した罪の赦しを願う勇氣をお持ちの方です。どうぞこの重要な問題について、私たちに教えてください。」

〔答え〕

この三つ目の質問への答えも、愛の光の中に見つけ

ることができます。心から率直に申し上げます。赦しとは、真に愛する人の発する最後の言葉です。赦しとは、神が愛されるような愛の可能性を示す最高のしるしです。神は私たちを愛しておられるので、いつでも私たちをお赦しになります。間近に迫った聖年という観点から見て(これは赦しと免償を求めるための好機です)、教会が主イエスの教えに導かれ、主の御前に出る日まで、先頭に立って不断の改心の旅に出発することを願っています。そういうわけで紀元二千年期の始まりに当たり、教会共同体は「その子らの罪深さをより深く認識する」(「紀元2000年の到来」33)べきであると書いたのです。

聖年の扉への旅は、生活を変えたい、心の底から主に向かって改心したいと望む人々にとって本物の巡礼です。その敷居を越えるとき、それが何を意味するかを忘れてはなりません。聖なる扉は、キリストがお示しになる新しい生命への入り口です。そして生活は、皆さんもご存じのように理論ではなく、日々実際に生き抜かれるものです。生活とは私たちの全ての態度と言葉、行ない、思いであってひとりの人間の全体に関

わることで、ありのままの自分を私達自身に見せてくれます。

親愛なるローマの若い皆さん、あなた方はいつでも和解と赦しの生きたしるしになるようがんばると約束してくれました。感謝します。若い皆さんには、誠実で寛容な友情を示す証人となる機会がたくさんあります。そうした機会を増やしてください。喜びと、キリストの現存という賜物が皆さんのうちに育つでしょう。それは、皆さんの知っている人全員に伝えて分かち合うべき喜びです。皆さんはそのために召されています。イエスただ一人が世の救い主です。イエスこそ、全ての人の生活に本当の意味を与えてくれる生命そのものです。

皆さん、正当な好奇心と向学心をもって、倦まず尋ねてみてください。これから世間に出ようとする皆さんの年齢なら、新しいこと、面白そうなことについて知りたいのは当然です。人生を理解したいという望みを保ち、生命を愛し、神と協力して世を救うという皆さんにゆだねられた賜物、使命を愛してください。

(1999・3・25)

教皇様の動き

● 9・22 一般謁見の後、教皇様はイスラエルとパレスチナからのユダヤ、イスラム、キリスト教徒を代表する三人の若者にメッセージを送り、新しい千年期を迎える祖国で平和をもたらす者となるよう励まされた。「三人の代表者と全てのイスラエル、パレスチナの若い皆さんは平和を実現する担い手となるよう呼ばれています。人々や祖国、世界の運命を方向づける責任が、あと数年で皆さんの世代に任されることとなります。この大変な仕事を恐れなくてください。希望と若さが支えてくれるでしょう。平和は単に協定だけに基づくのではなく、一人一人の中から生まれることを覚えてさえいれば、その仕事を成し遂げられるでしょう。恒久平和を求めるならばこのことがとても大切です。未来の平和はあなたたちの心にかかっています。人々を深く信頼する人にならなければなりません。そして人間の壮大な使命への責任を深く感じてください。真理と威厳、犯すことのできない人々の権利を尊重しながら追い求めて行く使命です。聖地を訪れたいと思っています。神のご意志があれば皆さんの祖国で再会することができるでしょう。皆さんの働きが実るよう神からのたくさんの恵みを願っています。」

● 9・30 婦人学学会参加者に対し、母子双方の生命を守る効果的な治療法があるにもかかわらず、墮胎や中絶を推し進める大きな社会的プレッシャーがある現在、「生命の守り手、生命に仕える者となるよう」励まされた。

● 9・30 教皇様は聖ペトロ大聖堂を祝福される前に、「聖ペトロは今も『キリストの愛の代理者』としての使命を果たしている」と話された。

● 10・3 数名の教区司祭とフランシスコ会員の列福式の後で教皇様は、天においてになる教会の御母と列福された人々に、ヨーロッパの代表者会議の仕事を託され、「マリアは神の計画に対して私たちが『はい』と答えるよう教えてください」と話された。

● 10・6 教皇様は「神の本質は無限の愛の秘儀」について話され、「聖書によると、洗礼の秘跡で私たちが神との特別な父子関係に入れることにより、聖霊が私たちに御父の愛をもたらせてくださる」と言われた。

● 10・10 教皇様は「ロザリオは単純さと深さ、個人面と共同体面を見事に調和させた折り」だから共に聖母を呼び教会がますます「神と人々、そして人々の間をつなぐ橋になるよう」祈ることを勧められた。

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人精道教育促進協会

教理省による

<信仰宣言>定式の解説

(試訳)

1 教会はそもそもの初めから、十字架につけられ復活された主に対する信仰を告白し、教会の信仰の基本的な内容をいくつかの定式に表わしてきました。主イエス・キリストの死と復活という中心的な出来事は最初のうち簡単な定式に表わされましたが、後になってより発展した定式に表明されるようになりました。(1) その結果、教会がキリストの言葉とわざを通して受けたこと、並びに「聖霊の示唆から学んだ」(2) ことを絶え間なく信ずべきこととして宣言する働きに命を与えることになったのです。

新約聖書は過ぎ越しの出来事直後に弟子たちが宣言した最初の信仰告白の特異な証言です。「私が第一にあなたたちに伝えたことは私自身受けたことである。すなわち聖書に記されているとおり、キリストは私たちの罪のために死に、葬られ、聖書に従って三日目によみがえり、ケファに現われ、また十二人に現われた。」(3)

2 数世紀にわたって、イエスは神の御子であり主であると証言する不変の核心・基礎から、信仰の一体性と諸教会の一致・交わりを証する信条(symbols)が発展してきました。それらの中から、各々の信者が知り、また信仰を告白するよう要求される根本的な真理が集められました。そして、洗礼志願者は洗礼の秘蹟を受ける前に信仰宣言をするようになったのです。教父たちもまた信仰の真理のより完璧な提示、あるいはそれら真理の正統性擁護という歴史的な挑戦に応じるために公会議に集い、現在に至るまで教会生活の中で特別な場を占める(4) 新しい信仰宣言を公式化しました。これら信条の多様性は唯一の信仰の豊かさを物語っており、ひとつとして新たな歴史的な状況に応えるために後になって公式化された信仰宣言に取って代わられたり無効にされたものはありません。

3 「あなたたちを真理に導く」(ヨハネ16,12) 聖霊を与えるというキリストの約束は絶えず教会の歩みを支えています。教会の歴史を通して、ある真理は聖霊の働きにより獲得されたものとして定義され、その中にもともとの約束実現の諸段階を見ることができ、しかし、他の真理の場合、神がご自分の愛の秘義によって、その真理を通して人間の救いのために啓示しようと望まれたことがらすべてを(6) 完全に把握するにはまだまだ深く理解する余地が残っています。

近年においても、教会は人々への司牧的な心遣いから、昔からの真理をより明白なかたちで表現するのが適切であると考えました。さらにキリスト信者のなかのある者が教会共同体において教会の名においてある役目を果たすとき、聖座が認可した公式に従って信仰宣言すべきであるという義務が加えられました。(7)

4 この新しい信仰宣言(信仰告白)はニケア・コンスタンチノープル信経(信条)と、信者が受け入れられるべき諸真理の順位をよりよく区別するための三つの命題(パラグラフ)から成っています。これらパラグラフを正確に説明するには、教会の教導職が与える真正な意味がよく理解され、受け入れられ、いささかの欠如部分もなく保存されるよう、明白な提示をしなければなりません。

現代の用法によると教会という言葉は多様な意味をもっていますから、教会内で活動する人の具体的で固有な働きや役目に言及するとき、その言葉の意味を明確にしておく必要があります。信仰と道徳に関する分野において、信者に対して拘束力のある権威をもって教える役目を果たす資格があるのは、ローマ教皇と教皇に一致した司教団だけです。(8) 司教たちは「キリストの権威を賦与されている真正な師です。」(9) なぜなら司教たちは神の制定により、「教導職と司牧統治職において」(10) 使徒たちの後継者であり、ローマ教皇と共に全教会の上に最高で完全な権能を行使します。ただし、この権能はローマ教皇の同意がなければ行使できません。

5 最初のパラグラフは次の通りです。「また私は書かれたものあるいは聖伝によって伝達された神の言葉に含まれているすべてのことがらで、教会が荘厳な判断あるいは通常かつ普遍的教導職を行使し、神に啓示された真理として信ずべく提示したことがらを確認する信仰によって信じます。」(11) このパラグラフで教えられていることは、神により正式に啓示されたものであり変更不可能であると、教会が提示するすべての教えを含みます。

これらの教えは、書かれた神の言葉や書かれずに伝達された神の言葉で、教皇が ex cathedra 教座から話すことによって、あるいは公会議に集う司教団によって、神的に啓示された真理であるとする荘厳判断により定義された真理、あるいは通常かつ普遍的教導職に

よって信ずべきことがらとして不可謬的に提示された真理に含まれています。

これらの教えは信者のすべてに神学的信仰の同意を要求します。したがってそれらを執拗に否定するか執拗に疑う者は、教会法典の該当条項に定められた通り、異端に陥ることになります。(12)

6 信仰宣言の第二命題は次の通りです。「また私は信仰と道徳に関して教会が最終的に提示したことすべてを堅く受け入れ信じます。」この公式が教えることがらには、教義あるいは道徳の分野に属するすべての教えが含まれています。(13)それらは教会の教導職が正式に啓示された教えとして提示したものでなくても、信仰の遺産を忠実に保持し提示するために必要なものです。

これらの教えはローマ教皇が *ex cathedra* 教座から話すことによって、あるいは公会議に集う司教団によって莊嚴に定義される時もあり、また通常かつ普遍的教導職によって「最終的な定義として受け入れるべきである」と(14)不可謬的に教えられる時もあります。したがって各信者は、聖霊が教会の教導職を助けるという信仰と、教導職が不可謬であるという教えとを基とした諸真理に対して、確固とした心底からの同意を示さなければなりません。(15)これらの真理を否む者はカトリックの教えを拒む立場(16)に立つことになり、カトリック教会と完全な交わりを保つことができなくなります。

7 この第二のパラグラフに属する真理は多種多様でそれが有する啓示との関係もそれぞれ異なった性格をもちます。真理のうちのあるものは歴史的な関係から見て啓示と必然的につながっており、またあるものは教会の任務である理解を深める努力の一段階での論理的な結論であることを示しています。これらの教えは、それが啓示されていない要素、あるいは未だ啓示された真理として明白には認められていない要素を信仰のデータに加えるかぎり、公式に啓示された真理として提示されない可能性があるというのは事実ですが、だからと言ってその教えが啓示された真理と少なくとも内在的なつながりを有するゆえに要求される、決定的な性格を減少させるものではありません。そればかりか、教義の発展のある段階で、信仰の遺産の内容と言葉の理解が教会生活のうちで発展した結果、教会の教導職がこれら教えのいくつかを神の御業かつカトリック信仰の教義として宣言する可能性を除外することはできません。

8 教会が神的啓示による真理(第一のパラグラフ)として提示するか、あるいは最終的な決定として受け入れられるべき真理(第二パラグラフ)として提示するかによって、要求される同意の性格が変わるか否かについては、いずれの場合も十全かつ取り消し不

可能な同意を要求するという点で、両者の間に相違のないことを強調しなければなりません。違いは、超自然徳である信仰に関することです。第一パラグラフの真理に関して、同意は神の言葉の権威に対する信仰を直接の根拠とします(*de fide credenda*の教え)。第二パラグラフの真理の場合、同意は教導職を助ける聖霊に対する信仰と教導職の不可謬性に関する教会の教えに対する信仰を根拠とします(*de fide tenenda*の教え)。

(続きは次回以降の付録にて)

(注)

1. 簡単な定式は通常ナザレトのイエスにおいて救い主の預言が実現したことを宣言します。たとえば、マルコ8,29;マテオ16,16;ルカ9,20;ヨハネ20,31;使徒行録9,22。複雑な定式は、復活に加えて、イエスの生涯の主な出来事とその救済的意義を告白します。たとえば、マルコ12,35-36;使徒行録2,23-24;1コリント15,3-5;16,22;フィリッポ2,7;10-11;コロサイ1,15-20;1ペトロ3,19-22;黙示録22,20。救いの歴史と過ぎ越しを頂点とするナザレトのイエスの歴史的な出来事に関する信仰告白の定式に加えて、新約聖書にはイエスの存在そのものを扱う信仰告白・宣言があります。1コリント12,3「イエスは主である。」;ローマ10,9では、両形式の信仰告白が見られます。
2. *Dei Verbum* (第二バチカン公会議「啓示憲章」)以下で、DV), 7参照
3. 1コリント15,3-5
4. カトリック教会のカテキズム(以下でCCC)、193
5. ヨハネ16,13
6. DV, 11参照
7. 教理省*Profession of Faith and Oath of Fidelity* (信仰宣言と忠実の誓い), AAS (使徒座広報、以下でAAS) 81(1989);CIC (新教会法典、以下でCIC) ,.883。
8. *Lumen Gentium* (第二バチカン公会議「教会憲章」)以下でLG) ,25
9. 同上、25
10. 同上、22参照
11. DS (カトリック教会文書資料集) 3074参照
12. CIC,750と751;1364の1;CCEO (東方教会教会法典) ,598;1436の1
13. パウロVI世、*Humanae vitae*、回勅「フマーネ・ヴィテ」, 4; AAS 60(1968);ヨハネ・パウロII世*Veritatis splendor* (真理の輝き) , 36-37; AAS 85(1993), 1162-1163。
14. LG, 25参照
15. DV,8&10; *Mysterium Ecclesiae* (教理省宣言「教会の秘義」, 3; AAS 65(1973),400-401。
16. ヨハネ・パウロII世、自発教令*Ad tuendam fidem* (信仰養護のために) (1998.5.18)。